

市街地における大型子育て支援施設の役割と限界 : 浜松こども館の利用者特性から

著者名(日)	勝浦 範子, 福岡 欣治
雑誌名	静岡文化芸術大学研究紀要
巻	9
ページ	65-72
発行年	2009-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1132/00000133/

市街地における子育て支援施設の役割と限界 ー浜松こども館の利用者特性からー

A study of the users of Hamamatsu Children's Plaza; An urban facility for children's recreation: The roles and limitations as a center for child-rearing support

勝浦 範子

文化政策学部国際文化学科

Noriko KATSUURA

Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

福岡 欣治

文化政策学部文化政策学科

Yoshiharu FUKUOKA

Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

本研究は市街地における子どものレクリエーション施設が子育て支援センターとしてどのような機能を果たすかについて調べることが目的とし、2003年の2月、3月に「浜松こども館」の来館者ならびに館まで2 km以内にある幼稚園・保育園に通園する園児をもつ近隣在住者を対象に質問紙調査を実施した。いずれの調査対象者も末子が8歳以下であることを条件とした。調査対象者は以下の尺度により、分類、分析された。第一は館利用に関するもの、例えば利用頻度、目的、所要時間などである。第二は調査対象者及びその末子の日常生活に関するもの、例えば児童公園、ショッピングセンター、図書館などの利用頻度などである。第三は調査対象者が子育てに対して受けている物理的、心理的な支援のレベルである。第四は調査対象者の不安のレベルである。近隣在住者で利用の多い群は少ない群（または利用無し群）に比べ、より活動的で社会性があり、子育て支援にも恵まれていた。また、来館者の平均所要時間は30分を超えているが、遠くからの来館者は子育て不安のレベルが比較的高かった。立地の利便性と多機能性が利用に結びついていると考えられる。

The purpose of this study was to identify the function of an urban facility for children's recreation as a center for child-rearing support. The study was conducted between February and March, 2003. We analyzed questionnaires given to two groups of parents: the first was visitors of the plaza, and the second was local parents whose children attended nurseries within 2 km of the plaza (of which some visited the plaza, and others did not). Each subject had a youngest child who was eight years old or younger. Subjects were analyzed and classified based on the following criteria. The first concerned the plaza: frequency of visits, purposes of visits, travel time, etc. Another concerned lifestyle of the subjects and their youngest children: frequency of visits to playgrounds, shopping malls, libraries, etc. Third was the level of physical and psychological assistance subjects received for child-rearing. Fourth was the subjects' anxiety levels. We discovered that frequent visitors of the plaza were more active, social, and had more support in child-rearing than infrequent (or non-) visitors. Visitors found it a good location, and expected it to serve various functions. Also, the average visitor traveled over 30 minutes one way, and many parents who traveled long distances showed relatively high anxiety levels.

1. 問題と目的

1-1. 研究の背景

1994年に発表されたエンゼルプラン（児童育成計画策定指針）、1999年に発表された新エンゼルプラン以来、「子育て支援」の対象は母親の就業、病気などの事情により「保育に欠ける」家庭から、「子どもを持つすべての親や家庭」に拡大された（文部省・厚生省、2000）。その理念に基づき、各自治体は既存の施設において、あるいは施設を新設して様々な育児支援事業を行い始めた（勝浦、2002）。エンゼルプランに基づく諸事業は全ての家庭を対象とし、様々な支援事業が用意されてはいるが、「利用を待つ」支援であることから、子育て支援を最も必要とする家庭には届かないことが懸念される。「子育て支援に積極的に関わってこない潜在的な子育て不安を持つ母親にこそ最も支援が必要である」と

も言われるように、必要性和利用度は必ずしも一致しないのである（水内・林・七木田、2000）。

むしろ、従来型の事業の中には、実質的に「全ての家庭」に届いていたものが見受けられる。エンゼルプラン以前のシステムでは子育て支援の拠点は地域の保健所であり、保健師が中心的役割を果たしてきた。保健所が実施してきた事業に1歳半健診、3歳児健診などの健康診断があるが、これらの健康診断は各家庭に通知が届くという積極的に「声掛け」する支援である。子育て支援の利用に積極的でない保護者も利用しやすいことから、利用率が高く、ほとんど「全ての家庭」に届いている。これらの健診から、発達上問題のある子どもや子育て環境に問題のある家庭を把握し、継続して支援する事業が展開されてきた。特に支援の必要な家庭をスクリーニングする体制がとられてきたのである。なお、全ての新

生児に対し家庭訪問を実施してきた自治体（例：東京都江東区）もある。

1-2. 「利用を待つ」支援事業の利用を妨げる要因

従来の報告を概観すると、「利用を待つ」支援事業の利用を妨げる要因については、以下の3点を指摘することができる。

(1) 事業内容・場所の認知

愛知県内の諸地域での支援センター事業の利用について保健センターの1歳半検診受診者を対象とした調査（神田・山本，2000）では、子育て支援事業に参加しない主な理由は「事業内容が分からない」「場所が分からない」であり、ともに非利用者の69.9%が挙げていた。同じく愛知県内〇市の保健センターにおける4ヶ月・1歳半検診を通じて実施した調査（中谷，2001）では、同市で実施されている育児相談、育児サークルなど9事業について調べたところ、認知度は最も高いもので47%、低いもので23%であり、利用しない理由として他に「時間がない」が17.8%、「自分には必要がない」が2.8%であった。センターの場所、事業内容の認知度が低いことが利用を妨げている最大の理由であった。

(2) 支援施設までの所要時間

前述の神田・山本（2000）によれば、「センターが遠い」という理由が事業に参加しない理由の5.9%であった。支援施設までの所要時間が長い程非利用が増える傾向にあり、所要時間が10分未満の場合には参加経験者は約80%であったが、所要時間が20分～29分では同約40%。所要時間が30分～39分では同約20%、所要時間が40分～49分ではほとんど参加経験者はいなくなっていた。施設への所要時間が利用に影響するという結果は東京の調査でも認められており、東京郊外にあり週5日屋内・屋外で自由に遊べ、イベントにも参加できる子育て広場「武蔵野012」では、所要時間15分以内の利用者が半数を超えていた（柏木・森下，1997）。

(3) 養育者の特性と子育て支援事業の特性との交互作用

前述の中谷（2001）は、4ヶ月児及び1歳半児を持つ母親から育児満足得点と育児不安得点それぞれの上位25%、下位25%を抜

粋し、両群が望む事業に違いがあるかを調べている。事業は経験的・環境的、集中的・拡大的の2つの軸を元に分類したうえ、各分類への利用意図が調べられた。その結果、低満足群および高不安群は、相対的に他の参加者との積極的交流を前提としない拡大的・環境的な支援事業（遊び場、託児、情報誌）を多く希望していた。また、低満足群は集中的・環境的な事業（育児サークル、幼児教室など）の利用希望が少なく、低不安群は拡大的・経験的な支援事業（親子行事、子育て講演会）の利用希望が少なかった。低満足群と高不安群はともに子育てに困難を感じていると考えられるが、彼らは子育て支援者からの直接の援助や母親仲間との交流を望まないことが特徴であると言える。

1-3. 本研究の目的

(1) 浜松こども館の概要

本研究が検討対象とする「浜松こども館」は、2001年11月に浜松市によって設立され、市の外郭団体（財団法人浜松市文化振興財団）が運営する大型の屋内施設である。市街地中心部にある商業施設（ザザンティ浜松中央館）の6・7階に位置する。館内には、様々なコーナーや遊具があるオープンスペース、乳幼児と保護者を対象としたものから小学校低学年の子供を対象としたものまで様々なイベントを行う大小の部屋、及び3歳児までを対象とした有料の託児室などがある。入場料は、乳幼児は無料、小学生が100円、中学生以上成人が200円である。乳幼児は入館に保護者または引率者の同伴を必要とするが、小学生以上は不要である。車で来館した場合は建物内にある有料の駐車場を利用する。この施設は典型的な「全ての家庭を対象とした」「利用を待つ」タイプの支援を提供する施設である。最大の特徴は中心市街地に位置することであり、また保育所等の既存の子育て支援施設ではなく商業施設に併設されているということである。自由な遊び場であり、託児、情報提供の場でもある。定期的あるいは集中的に行われる様々な親子イベントは参加者を固定することはないが、リピーターになれば、利用者同士、館のスタッフ（元校長、保育士、栄養士などの専門家を含む）と顔見知りにもな

る場である。

(2) 本研究の目的

子育て支援施設・事業の利用には施設への所要時間が大きな影響があること、支援が望まれる群が利用を希望するとは限らないことなどが先行研究から示唆されている。複合的・多目的子育て支援施設である浜松こども館の利用者・非利用者の特性、および同館の提供する様々な支援の内容と利用者および非利用者の特性の関連を分析することにより、このような市街地における都市型の子育て支援施設の果たす役割とその限界を考察するのがこの研究の目的である。なお、個別質問の単純集計結果については別途報告しているため（勝浦・福岡，2005）、本稿では利用者と非利用者、利用頻度の高い人と低い人の比較等を通して、より活発な利用を促進する要因について検討する。

3. 方法

3-1. 手続き

開館1年を過ぎた2002年2月下旬から3月上旬にかけて、来館者を対象とするアンケート調査（来館者調査）および近隣在住者を対象とするアンケート調査（近隣在住者調査）を実施した。前者は利用者に対する調査であり、後者は利用者と非利用者の両方を含む調査である。来館者調査は子供を同伴した保護者に手渡し、その日の帰りまでに提出してもらうか、郵送により回収した。近隣在住者調査はこども館から直線距離で約2km以内に位置する保育園5園と幼稚園4園、および2保育園に開設されている子育て支援センター利用の保護者を対象とし、各施設を通じて調査票を配布・回収した。

3-2. 対象者

来館者調査では800部を配布し、回収は333部、回収率は41.6%であった。また、近隣在住者調査では、配布総数は812部であり、うち回収は588部、回収率は72.4%であった。回収された調査票のうち、調査目的に照らして「末子が8歳以下、回答者が20歳以上、50歳以下で子どもと同居」の条件を満たす回答を有効回答とした（勝浦・福岡，

2002と同様）。来館者調査では308部、近隣調査では557部が有効回答であった（配布総数に占める有効回答率は、それぞれ38.5%と68.6%）。

3-3. 調査内容

①**フェイスシート** 回答者の年齢、仕事の状況、家族構成、子どもの通園・通学状況などをたずねた。

②**利用状況** こども館の利用回数、館までの交通手段、所要時間、主な利用日（平日利用か休日利用か）、同伴者などが含まれる。

③**利用目的** こども館の利用目的について、①自由な遊び、②イベント、③同年代の子ども存在、④親同士の交流、⑤託児、の5項目それぞれについて3段階の評価を求めた。これらの項目は、必要な子育て支援についての調査結果（神田・山本，2000）をもとに作成した第1回の調査（勝浦・福岡，2002）の質問項目から抜粋した。

④**子どもの遊びの状況** 外遊びの頻度、近所の遊び友達の有無、外遊びの場までの所要時間などの7項目でたずねた。複数の子どもがいる場合、末子についてたずねた。遊びの状況はこども館利用の必要性を知るための指標であるとともに、乳幼児の健全な発達と関連していることが報告されている（服部・原田，1991）。

⑤**子連れでの外出先、頻度** 回答者と子どもの生活状況を知るため10項目を設けた。外出先として、公園は3種類（近所の児童公園、不特定の児童公園、郊外的大型公園）に分け、親子で利用出来る施設である児童館・公民館・図書館（1項目）、買い物場所2項目（スーパーなどで、大型ショッピングセンターで）、親子で集まって交流する場2項目（保育園・幼稚園での親子遊び、子育てサークルなどの集まり）、実家・親類・友人宅などの訪問、子ども（上の子も含む）のお稽古で計10項目とした。この10項目の外出先は、その特性により特定－不特定、閉鎖型－開放型に分類することが出来る。特定の外出先には、近所の児童公園、児童館・公民館・図書館、保育園・幼稚園での親子遊び、子育てサークルなどの集まり、実家・親類・友人宅など、子ども（上の子も含む）のお稽古の6項目、不

特定の外出先には、不特定の児童公園、郊外の大型公園、スーパーなどでの買い物、大型ショッピングセンターでの買い物の4項目が含まれる。閉鎖型の外出先には、特定の外出先のうち、子育てサークルなどの集まり、実家・親類・友人宅など、子ども（上の子ども含む）のお稽古の3項目が含まれ、それ以外の7項目は開放型の外出先である。

⑥**託児の利用** 育児に関する手段的サポート（荒木・大石・岩本・渡辺・池田・達田・小川，2001）の指標としてたずねた。

⑦**会話の相手、頻度** 子育ての相談に乗るなどの心理的サポート（荒木他，2001）の指標として用いた。会話の相手として家族・親類について4項目、他に近所の人、友達、職場の人について各1項目、計7項目とした。なお、母親が近所に話し相手がいる場合には乳幼児の発達が順調であるという報告がある（服部・原田，1991）。

⑧**子育て不安** 牧野の育児不安尺度（牧野，1982）の項目から、勝浦・福岡（2002）による第1回調査の結果を考慮し、9項目を抜粋して用いた。

4. 結果

来館者調査及び近隣在住者調査から、利用状況からみた対象者の特性について、次のような結果が得られた（平均値の差の検定で分散が異なる場合はWelchの検定による）。

4-1. 来館者調査から

(1) 利用頻度の高低による比較

利用回数が3回までの人を低利用群、4回以上の人を高利用群として比較した結果、回答者の「会話の相手、頻度」について、高利用群は低利用群に比べて実の親と話す頻度（ $t(297)=1.98, p<.05$ ）が有意に低かった。

(2) 平日利用群、休日利用群の比較

主に平日にこども館を利用すると答えた人を平日利用群、主に休日に利用すると答えた人を休日利用群とした。回答者308名のうち無回答9名（2.9%）を除いた299名中、平日利用群は54名（18.1%）、休日利用群は165名（55.2%）であった。両群を比較した結果、平日利用群は休日利用群よりも未子

が未就園である比率が有意に高く（ $\chi^2(1)=15.64, p<.001$ ）、子どもの人数は有意に少なかった（ $t(183)=3.85, p<.001$ ）。「未子の遊びの状況」に関して、平日利用群は休日利用群よりも近所の子と遊ぶ回数が少なかった。（ $t(195)=2.53, p<.01$ ）。回答者の「会話の相手、頻度」については、平日利用群は休日利用群に比べて実の親と話す頻度（ $t(214)=3.05, p<.01$ ）、義理の親と話す頻度（ $t(207)=2.69, p<.01$ ）がそれぞれ有意に高かった。平日利用することで近所の子と遊ぶ回数が少ないことを補っていると考えられる。

(3) 利用目的による比較

①**自由な遊び** 利用目的についての項目は①自由な遊び、②イベント、③同年齢の子どもの存在、④親同士の交流、⑤託児の5項目であるが、経験的・環境的、集中的・拡大的の2つの軸で分類すると、①「子どもを自由に遊ばせたい」は環境的・拡大的事業にあてはまると考えられる。回答者308名のうち無回答6名（1.9%）を除いた302名中、「大いにあてはまる」を選んだ回答者は264名（87.4%）、「少しあてはまる」を選んだ回答者は34名（11.3%）であり、「あてはまらない」を選んだ回答者は4名（1.3%）にすぎなかった。こども館が「遊びのための施設」として利用者によく認知されていることがわかる。「大いにあてはまる」「少しあてはまる」と答えた回答者が大多数であったため、この項目については利用者の特性に関する分析はおこなわなかった。

②**イベント** こども館では幼児と保護者を対象とした様々なイベントを行っている。自由に参加でき、閉鎖的な集まりではないが、リーダーや他の参加人との交流もある。経験的・環境的、集中的・拡大的の2つの軸で分類すると、②「イベントが楽しい」は経験的・拡大的事業にあてはまると考えられる。利用目的で「イベントが楽しい」という項目に「大いにあてはまる」と回答した人をイベント高関心群とし、「あてはまらない」と回答した人をイベント無関心群とした。無回答者23名（7.5%）を除いた285名中、イベント高関心群は58名（20.4%）、イベント無関心群は93名（32.6%）であった。

「末子の遊びの状況」についてイベント高関心群はイベント無関心群よりも、ゲーム時間は有意に短かった ($t(128)=2.19, p<.05$)。「子連れでの外出状況」についてイベント高関心群はイベント無関心群よりも閉鎖型の外出行先（子育てサークルなどの集まり、実家・親類・友人宅など、子どものお稽古の3項目計）へ行く頻度が有意に高かった ($t(128)=2.18, p<.05$)。「回答者の会話の状況」についてイベント無関心群はイベント高関心群に比べ、配偶者と話す頻度が有意に高かった ($t(66)=2.26, p<.05$)。イベント高関心群が閉鎖型の外出行先に行く、近所の人と話す回数が多いことは対人関係に積極的な特性を持つことを示唆している。一方、イベント無関心群は対人関係を苦手としており、夫という最も身近な相手との会話が多いと考えられる。

③同年代の子どもの存在 利用目的で「同じくらいの年の子がいる」という項目に「大いにあてはまる」と答えた回答者を同年代児高関心群とし、「あてはまらない」と答えた回答者を同年代児無関心群とした。無回答13名(4.2%)を除いた294名中、同年代児高関心群は68名(23.1%)、同年代児無関心群は67名(22.8%)であった。「末子の遊びの状況」について同年代児高関心群は同年代児無関心群に比べ外遊び場への所要時間が有意に長かった ($t(177)=2.24, p<.05$)。外遊び場が遠い利用者は、広いこども館に外遊び場に代わる機能を期待している可能性も考えられる。

(4) 至近の来館者と遠来の来館者の比較

来館者の平均所要時間は32.7分 ($SD=22.5$) という結果であった。先行研究に比べると、こども館は遠来の利用が多く、所要時間が比較的長くても利用されていると言える。

来館に要する時間が15分以内という至近の来館者と30分以上という遠来の来館者を、5つの属性（母親の年齢、母親の就業の有無、母子のみの利用か、他の人と一緒に来るか、利用日：平日利用か週末利用か、子育て不安の高さ）で比較した。この項目の無回答48名(15.6%)を除いた260名中、至近来館群は74名(28.5%)、遠来群は135名(51.9%)であった。その結果、「母親の年齢」は至近来館群が平均年齢34.6歳 ($SD=4.07$)、

遠来者が33.1歳 ($SD=4.10$) であり、至近の来館者が有意に高かった ($t(207)=2.62, p<.01$)。子育て不安は遠来の来館者の平均が23.3 ($SD=4.96$)、至近の来館者の平均が21.1 ($SD=5.28$) であり、遠来の来館者が有意に高かった ($t(195)=2.87, p<.01$)。母子のみの利用か、他の人と一緒に来るかという比較では、至近の来館者では他の人も一緒に来るのが48名(64.9%)、母子のみが26名(35.1%)であり、他の人も一緒に来る場合が多かった。遠来の来館者では他の人も一緒に来るのが53名(39.3%)、母子のみが82名(60.7%)であり、母子のみでの来館が多かった。両群の分布を比較したところ、有意差が認められた ($\chi^2(1)=12.55, p<.01$)。母親の就業の有無、平日利用か週末利用かについて、至近群と遠来群に有意差は認められなかった。

こども館は遠来の利用者が多いが、遠来の利用者は年齢が若く、母子のみで来館することが多く、子育て不安が高い。至近の利用者は年齢が高く、他の人と一緒に来館が多く、子育て不安が低い。遠来の利用者は至近の利用者に比べて孤独で不安な子育てをしている傾向があると言える。

4-2. 近隣在住者調査から

(1) こども館利用の有無、利用頻度の高低による比較

近隣在住者は来館に要する平均時間が16.0分 ($SD=7.0$) であり、こども館を利用しやすい地の利があるが、開館1年を経てもなお約3分の1が未利用であった（無回答者1名を除く556名中176名(31.7%)）。未利用群と既利用群を比較した結果、既利用群の方が未利用群よりも専業主婦の比率が有意に高く ($\chi^2(1)=5.34, p<.05$)、末子の年齢が有意に高かった ($t(539)=2.28, p<.05$)。

また、こども館の利用経験の無い未利用群と既利用群の中でも特に利用回数4回以上の高利用群(156名、28.1%)を比較した結果、「末子の遊びの状況」「子連れでの外出状況」「託児状況」「回答者の会話の状況」について両群に有意差が認められた。「末子の遊びの状況」では、高利用群は未利用群に比べ、近

所の遊び友達の数 (t(321)=2.32, $p<.05$)、近所の友達と遊ぶ回数 (t(298)=2.56, $p<.05$)、外遊びの回数 (t(276)=4.37, $p<.001$) がそれぞれ有意に多かった。「子連れでの外出状況」について高利用群は未利用群に比べ、不特定の外出先（不特定の児童公園、郊外の大型公園、スーパーなどでの買い物、大型ショッピングセンターでの買い物）(t(284)=2.18, $p<.05$)・特定の外出先（近所の児童公園、児童館・公民館・図書館、保育園・幼稚園での親子遊び、子育てサークルなどの集まり、実家・親類・友人宅など、子どものお稽古）(t(284)=4.53, $p<.001$)・閉鎖型の外先（特定の場所のうち、子育てサークルなどの集まり、実家・親類・友人宅など、子ども（上の子も含む）のお稽古）(t(302)=4.55, $p<.001$)・公園（近所の児童公園、不特定の児童公園、郊外の大型公園）(t(294)=2.98, $p<.01$)に行く頻度が、いずれも有意に高かった。「託児状況」について高利用群は未利用群に比べ、友人・知人に子どもを預ける頻度が有意に高かった (t(218)=3.81, $p<.001$)。「回答者の会話の状況」について高利用群は未利用群に比べ、近所の人 (t(346)=2.02, $p<.05$)、友達 (t(349)=2.01, $p<.05$) と話す頻度がそれぞれ有意に高かった。

「末子の遊びの状況」、「子連れでの外出状況」の結果から、高利用群は未利用群に比べて積極的に外出し、親子ともに友達との交流も多い。また、「託児状況」、「回答者の会話の状況」から、高利用群は心理的支援、道具的支援においても未利用群に比べて恵まれていると言える。

(2) 平日利用群、休日利用群の比較

未利用者および無回答計181名(32.5%)を除いた376名中、平日利用群は60名(16.0%)、休日利用群は202名(53.7%)であった。両群を比較した結果、平日利用群は休日利用群よりも末子が未就園の比率が有意に高く ($\chi^2(1)=11.31$, $p<.001$)、子どもの人数は有意に少なかった (t(255)=3.20, $p<.001$)。「末子の遊びの状況」について平日利用群は休日利用群に比べて外遊びが多かった (t(203)=3.32, $p<.01$)。「子連れでの外出状況」について平日利用群は休日

利用群に比べ、不特定の外出先、(t(222)=2.48, $p<.05$)、特定の外出先 (t(212)=2.99, $p<.01$)、閉鎖型の場所 (t(69)=2.35, $p<.05$)、公園 (t(72)=2.11, $p<.05$) に行く頻度がいずれも有意に高かった。

平日利用群は休日利用群よりも未就園の末子を持つことが多く、子どもの数は少なく、子連れで積極的に外出する傾向がある。

(3) 来館目的と利用者の特性について

①自由な遊び 未利用者および無回答者180名(32.3%)を除いた377名中、来館目的としての「子どもを自由に遊ばせたい」という項目に対して「大いにあてはまる」を選んだ回答者は271名(71.9%)、「少しあてはまる」を選んだ回答者は96名(25.5%)であり、「あてはまらない」を選んだ回答者は10名(2.7%)にすぎなかった。「大いにあてはまる」「少しあてはまる」と答えた回答者が大多数であったため、この項目については利用者の特性としての分析はしなかった。

②イベント 利用目的で「イベントが楽しい」という項目に「大いにあてはまる」と答えた回答者をイベント高関心群とし、「あてはまらない」と答えた回答者をイベント無関心群とした。未利用者およびこの項目の無回答者を合わせた193名(34.6%)を除いた364名中、イベント高関心群は41名(11.3%)、イベント無関心群は145名(39.8%)であった。

「末子の遊びの状況」についてイベント無関心群はイベント高関心群に比べて屋外の遊び場までにかかる時間が有意に長かった (t(100)=3.33, $p<.01$)。「回答者の会話の状況」についてイベント高関心群はイベント無関心群に比べて実の両親と話す頻度が有意に多かった (t(178)=2.17, $p<.05$)

遊び場まで比較的遠い層は広いこども館にイベントよりも外の遊び場の機能を期待していると考えられる。

③同年代の子どもの存在 来館目的で「同じくらいの子がいる」という項目に「大いにあてはまる」と答えた回答者を同年代児高関心群とし、「あてはまらない」と答えた回答者を同年代児無関心群とした。未利用者およびこの項目の無回答者188名(33.8%)を

除いた369名中、同年代児高関心群は64名(17.3%)、同年代児無関心群は112名(30.4%)であった。「末子の遊びの状況」に関して、同年代児高関心群は同年代児無関心群と比べ、テレビやゲームをする時間が長かった($t(158)=2.62, p<.01$)。「託児状況」に関しては、同年代児高関心群は同年代児無関心群と比べ家族に子どもをみてもらう頻度が高かった($t(157)=2.00, p<.05$)。

テレビやゲームで時間を費やしがちな子どもに対し、こども館が同じ年代の子どもと接することのできる遊び場としての機能を期待されていることも考えられる。

5. 考察

5-1. 支援の必要性とこども館利用の関連について

(1) 遠来の来館者、至近の来館者の特性から

浜松こども館は来館者調査での平均所要時間が30分以上であり、遠来からの利用者が多いという特徴がある。その理由として規模の大きさ・機能の多様性のほか、中心市街地に位置するという地理的特徴が考えられる。所要時間が30分以上の遠来の来館者を15分以内という至近の来館者と比較した結果、遠来の利用者は年齢が若く、母子のみで来館することが多く、子育て不安が高いのに対し、至近の利用者は年齢が高く、他の人と一緒に来館が多く、子育て不安が低いという違いがあった。

遠来の利用者は至近の利用者に比べ、子育て不安が高いことから支援の必要性が高いと考えられる。こども館の支援は、その必要性が高い層のうち、遠くても来館をいとわないという一部の養育者には届いているといえよう。

(2) 近隣の未利用者、高利用者の特性から

一方、近隣での利用状況をみると、未利用者は高利用者 비해、子育ての状況に恵まれない。高利用者は子ども、養育者ともに生活の質が高く、心理的支援、道具的支援においても恵まれている。こども館は地域の子育て環境の向上には役立っているが、地域の中で支援の必要度が比較的高い家庭には届いてい

ない。近くに大型の遊び場ができて一度も足を運ばないという養育者もいる。利用を待つ支援の限界である。

(3) 平日利用者の特性から

浜松こども館は平日・休日ともに開館しているが、来館者調査、近隣調査ともに平日利用者は休日利用者に比べ末子が未就園の場合が多かった。未就園の子どもとその養育者には特に日常的な支援が必要だと考えられるが、こども館は天候にかかわらず平日に行くことのできる遊び場として利用され、子育て支援に役立っていると考えられる。

また、来館者調査で平日利用群が休日利用群よりも近所の子どもと遊ぶ回数が少ないことからこども館が子どもと接する場としての機能を期待されていると考えられる。

5-2. 利用目的別にみたこども館の役割

浜松こども館を利用する目的で最も関心が高いのは子供を自由に遊ばせることであるが、次いで関心が高いのは、イベントと同年代の子供の存在である(勝浦・福岡, 2003も参照)。それぞれ、関心がある群と無い群は異なった特徴を持つことが明らかになった。

(1) イベントへの関心

こども館では幼児と保護者を対象とした様々なイベントを行っている。自由に参加でき、閉鎖的な集まりではないが、リーダーや他の参加者との交流もある。経験的・環境的、集中的・拡大的の2つの軸で分類すると、②「イベントが楽しい」は経験的・拡大的事業にあてはまると考えられる。このような子育て支援事業は「高満足」、「低不安」、「自信あり」群に望まれるという先行研究(中谷, 2001)があるが、来館者調査でイベント高関心群は無関心群に比べ、閉鎖型の外出先へいく頻度、近所の人と話す頻度が高いことから対人関係に積極的であると考えられる。子育てに「高満足」、「自信あり」を間接的に支持する結果であった。一方、イベントに関心を持たない群は配偶者と話す頻度が高かった。既存の人間関係に依存する傾向があると考えられる。

(2) 同年代の存在への関心

来館者調査では同年代児高関心群は同年代児無関心群に比べ外の遊び場への所要時間が有意に長かった。外の遊び場が遠い利用者は

広いこども館に外の遊び場の代わりの機能を期待している可能性も考えられる。

近隣調査では同年代児高関心群は同年代児無関心群と比べ、テレビやゲームをする時間が長かった。テレビやゲームで時間を費やしがちな子どもに対し、こども館が同じ年代の子どものいる遊び場としての機能を期待しているとも考えられる。

(3) 利用目的からみたこども館：まとめ

以上からこども館のイベント、同年代児の存在はそれぞれ別の機能を果たしていると考えられる。こども館の多機能性が異なった行動特性、人格特性を持つ多様な利用者の来館を促している。

5-3. 浜松こども館の特徴からみた都市型子育て支援施設への提言

以上から、こども館は子連れでの外出自体を好まないという層には届かないという限界はあるが、多機能な大型施設であり遠来の利用者が多いという特性から、物理的子育て環境に恵まれない層だけではなく、対人関係に積極的でなく、家族・血縁者以外との人間関係を構築して支援を得ることが苦手の養育者、子育て不安が高い養育者など、特に子育て支援が必要な家庭・親子にも利用されていると考えられる。

これらの結果を、都市型の子育て支援施設全般にあてはめて考えると、多機能であること、遠来の利用者にとって交通の便、駐車費用などの面で利用しやすいことが望まれる。多機能であることは幅広い特性を持つ層の利用を可能にする。自由な遊び以外の2つの大きな機能であるイベント、同じ年代の子どもの存在の機能の充実を図るには、例えば対人関係に積極的でない保護者でも利用可能なイベントの工夫が考えられる。閉鎖された空間

ではなくオープンな空間でのイベント、スタッフが中心となって子ども同士の関わりを促進し、親同士の関わりはあまり必要のないイベントなどが考えられる。また、大型施設は有料である上に駐車料金がかかることが多く、費用の負担が利用頻度を制限することになる。富裕層でなくても日常的な利用ができるように、低費用に抑えることが望まれる。

引用文献

- 荒木美幸・大石和代・岩本宏子・渡辺鈴子・池田早苗・達田志津子・小川由美子「育児期にある母親に対するソーシャルサポートと育児ストレスの関連性」長崎大学医療技術短期大学紀要、14(1)、2001年、89-95頁
- 服部祥子・原田正文「乳幼児の心身発達と環境—大阪レポートと精神医学的視点—」名古屋大学出版会、1991年
- 神田直子・山本理絵「愛知県内における子育て支援機関の支援と連携のありかたに関する研究(1)乳幼児を持つ親の、支援機関の認知・参加度と支援要求についての調査から」児童教育学科論集(愛知県立大学文学部)、34、2000年、1-13頁
- 勝浦範子「育児現場での支援の実践」藤崎真知代・本郷一夫・金田利子・無藤隆(編著) 育児・保育現場での発達とその支援(シリーズ臨床発達心理学;5) ミネルヴァ書房、2002年、96-112頁
- 勝浦範子・福岡欣治「浜松こども館・子育て支援アンケート報告書」2002年
- 勝浦範子・福岡欣治「浜松こども館子育て支援アンケート2003の報告：子育て支援ニーズに関する実践的研究」静岡文化芸術大学研究紀要、5 2005年、21-29頁
- 牧野カツコ「乳幼児を持つ母親の生活と育児不安」家庭教育研究所紀要、3、1982年34-56頁
- 水内豊和・林千津子・七木田敦「子育て支援センターを利用する母親の意識」幼年教育研究年報(広島大学教育学部附属幼年教育研究施設)、22、2000年、61-69頁
- 中谷奈津子「子育て支援事業における母親のニーズに関する研究—母親の育児不安の観点から—」愛知教育大学幼児教育研究、10、2001年、25-32頁